

BepiColombo 日欧共同水星探査ミッション：プロジェクト最新状況報告

BepiColombo Euro-Japan Joint mission to Mercury: Project Status update

笠羽 康正[1]; 早川 基[2]; 山川 宏[3]; 小川 博之[3]; 向井 利典[2]

Yasumasa Kasaba[1]; Hajime Hayakawa[2]; Hiroshi Yamakawa[3]; Hiroyuki Ogawa[3]; Toshifumi Mukai[2]

[1] 宇宙機構/宇宙研; [2] 宇宙研・宇宙機構; [3] 宇宙研

[1] JAXA/ISAS; [2] ISAS/JAXA; [3] ISAS

<http://www.stp.isas.jaxa.jp/mercury/>

紀元前から知られる水星は、「太陽に近い灼熱環境」と「軌道投入に要する多大な燃料」から周回探査は困難であった。過去の探査は、米国マリナー10号の3回の通過（1974-5）のみである。この探査は、この小さな惑星にはあり得ないと考えられていた磁場と磁気圏活動の予想外の発見をもたらしたが、その究明は30年以上続く夢に留まってきた。耐熱技術の進展に代表される技術革新が、ようやく大きな壁を取り除きつつある。「ベピ・コロombo (BepiColombo)」は、欧州宇宙機関（以下、ESA）との国際分担・協力によりこの惑星の磁場、磁気圏、内部、表層を初めて多角的・総合的に観測しようとするプロジェクトである。固有磁場と磁気圏を持つ地球型惑星は地球と水星だけで、初の水星の詳細探査＝「初の惑星磁場・磁気圏の詳細比較」は、「惑星の磁場・磁気圏の普遍性と特異性」の知見に大きな飛躍をもたらす。また、磁場の存在と関係すると見られる巨大な中心核など水星の特異な内部・表層の全球観測は、太陽系形成、特に「地球型惑星の起源と進化」の解明に貢献する。

本計画は、観測目標に最適化された2つの周回探査機、すなわち表面・内部の観測に最適化された「水星表面探査機(MPO)」(3軸制御、低高度極軌道)、磁場・磁気圏の観測に最適化された「水星磁気圏探査機(MMO)」(スピン制御、楕円極軌道)から構成される。ISAS/JAXAは、日本の得意分野である磁場・磁気圏の観測を主目標とするMMO探査機の開発と水星周回軌道における運用を担当し、ESAが残りの全て、すなわち、打ち上げから惑星間空間の巡航、水星周回軌道への投入、MPOの開発と運用を担当する。

両探査機は、一体として「ソユーズ・フレガート2B」ロケットで打ち上げられ、水星への旅を伴にする。水星軌道到達後には分離し、協力して観測活動を行う。

両探査機に搭載する数々の科学観測装置は、日欧研究者を交えた多数の装置開発チームで検討が進められており、2004年11月に搭載機器の選定が行われた所であり、プロトモデルの開発が今年度から行われる。実際の観測は、選ばれた装置開発チームに留まらず、広く日欧研究者で構成する「BepiColombo科学ワーキングチーム」で立案・実施される。本年三月より正式に「BepiColombo科学ワーキングチーム」の会合が開催され、今後科学観測に関して様々な事が決められて行く事となる。本講演では、これら科学観測に関連した状況及び、本ミッション全体について日欧双方の最新状況を報告する。